



Title	シンポジウム全体の総括報告：2つの考古学的アプローチとツーリズムの可能性
Author(s)	岡田, 真弓
Citation	先住民文化遺産とツーリズム：北海道の可能性(International Symposium: Indigenous Heritage and Tourism – Potential in Hokkaido). 2012年10月13日-14日. 北海道大学学術交流会館小講堂, 札幌市.
Issue Date	2012-10-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51258
Type	conference presentation
File Information	symp_sum.pdf



[Instructions for use](#)

International symposium 2012 Indigenous Cultural Heritage and Tourism

国際シンポジウム
先住民文化遺産とツーリズム
-北海道の可能性-

シンポジウム全体の総括報告
『2つの考古学的アプローチとツーリズムの可能性』

岡田 真弓
(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

1. 本シンポジウムのねらい

昨今、文化遺産とそれを取り巻く地域社会との関係性が重視されている。なぜなら、文化遺産を育んできた集団や受け継いでいく地域社会との関わりの中で、文化遺産は保護されていくものである、という認識が広まってきているからである。このような見地から、先住民族の文化遺産保護のあり方にも注目が集まっている。

岩波氏と平澤氏の発表にもあったように、北海道には日本の先住民族であるアイヌが生み出した有形、無形の文化遺産が数多く残されている。しかしながら現状では、アイヌの人々が、積極的に自分達の歴史にまつわる文化遺産の保護や活用に参画する機会は十分に確立されていない。13日の午前中のセッションで平取町の吉原氏、長野氏、川島氏、木村氏に紹介していただいた、平取町アイヌ文化環境保全調査室の取り組みは先駆的な事例と言えるだろう。

今回のシンポジウムのテーマに込めた私たちの思いは、いま北海道にあるアイヌ民族の文化遺産とそれに関わる人々の現状と挑戦を広く共有し、さらに地域社会における持続可能な文化遺産の保護・継承・活用をどのように進めて行くべきかを、考古学とツーリズムの視点から模索しようということである。その基本的な枠組みとして、パブリック考古学と先住民考古学という2つの考古学分野について、シンポジウム第一日目に基調講演をしていただいた。

2. パブリック考古学とは

基調講演者の1人目であるロンドン大学のシャドラホール先生は、パブリック考古学を「考古学がパブリックの利益に関係する限り、パブリックと相互に作用し合う、あるいはその可能性のある考古学について考え、実践する場」と定義されていた。つまり、考古学の実践を研究者だけではなく、一般の社会に広く開放し、共に働いていくことで、文化財の大切さに気付いてもらう、そして研究者の価値判断だけによらない歴史の提示を目指す考古学の1つの分野であるとも言える。ただし、一般市民の中には「その文化遺産を作り上げた先住民」「法的な文化遺産の所有者」そして「現在、その文化遺産の周辺に住んでいる人」が含まれており、決して均一的な集団とは言えない。では、なぜ考古学者はこれまでの在り方を内省的に捉え、一般市民や先住民族、そして公的機関を含むパブリックを意識した考え方を持つようになったのだろうか。それは、考古学は多分に政治的であり、決して中立的な学問ではないからだとと言える。そしてもう一つの理由として、考古学の実践およびそれがもたらす歴史像は、メディア、経済、観光、教育などにおいて現代社会と密接な結びつきを持っていることを挙げることができる。ただし、考古学の実践、あるいは文化遺産の評価を一般市民に開放するという事は、わたしたちの過去に対する「思い入れ」をそこに反映させるということでもある。したがって、考古学が文化遺産の評価を提示するプロセスに、一般市民が参画しさえすれば、適切な考古学の実践が確立されるというわけではない。先程も述べた通り、考古学は物質資料から過去を一面的に具体化してしまう力を持っており、これまで様々な国家の権力者によって政治的に利用されてきた。こ

うした過去の事例から、シャドラホール先生は、もし一般市民に考古学を解放した場合、一般市民によっても考古学が恣意的に利用される可能性があることを指摘されました。シンポジウムの企画者としては、シャドラホール先生のこうしたお考えは、新たなパブリック考古学の側面を提示してくださった。

3. 先住民考古学とは

先住民考古学については、二人目の基調講演者であるオクラホマ大学のワトキンス教授に説明していただいた。先住民考古学とは、まさに先に述べた「一般市民」の中にある多様性を意識する中で生まれた考え方と言える。

オーストラリアや北米、中南米のようにかつて植民地であり、現在は帝国主義権力から独立した地域においては、先住民と入植者との間で、文化遺産をめぐる経済的な利害、表象の仕方、さらにそれらの帰属や管理に関する問題が起きている。こうした背景には、植民地政策の一環として宗主国や優位者主導でマイノリティの歴史文化が規定され、先住民族が自分達の歴史文化と物理的に切り離されてしまったことが挙げられる。結果、その遺跡が存する地域の住民と、考古遺跡を生み出した先住民族と同じではなくなってしまうという事態が起これ、現在では元宗主国等によって持ち出された先住民族の遺物の帰属に対する問題が課題となっている。

こうした状況の中で生まれたのが、「先住民考古学」という考え方です。先住民考古学とは、先住民族との協働を通して、先住民族が持つ価値観、知識、習慣、倫理観、そして感覚を考古学の実践に取り入れることである、と定義されている。これは、非先住民族の研究者が先住民族の関わる文化と向かい合う時の、これまでの姿勢を問いなおすことでもある。

講演の中で、ワトキンス教授は、考古学と先住民コミュニティとの間で先住民考古学が果たす役割について言及された。それは、先住民族が文化遺産に対して抱く「思い」から考古学が学ぶストーリーがあり、同時に先住民族もまた考古学から知る祖先の営みがある、こうした相互の関係の構築を目指す考古学こそが先住民考古学である、というものだ。考古学は緻密な観察と前例との比較、そして時に科学的な方法を使って過去の営みを提示する学問である。対して、先住民族の人たちは、発掘調査によって出土した資料から、連綿と受け継がれてきた祖先の価値観を見出し、その資料をめぐる多様なストーリーを考古学者に提供することができる。こうした考えは、先住民族に関わる文化遺産の管理および考古学の調査へ参画を促す概念であると同時に、非先住民族である考古学者への啓発にもなっている。しかし、「どのように」先住民族の思いを考古学の解釈の中に活かし、「どのように」先住民族が自分たちの文化遺産へのアクセスを確保できるかは、未だ試行錯誤している段階である。

4. 2つの考古学とツーリズム

考古学界において、考古学の実践がパブリックにもたらす影響の大きさを深刻に捉え、また先住民族を含めた一般市民と文化遺産の評価プロセスを共有することを目指す動きが出る中で、ツーリズムが注目される理由は何であろうか。

ツーリズムとは、人が移動することで交流が生まれることであり、考古学はこの「交流」という場に期待を寄せていると言える。パブリック考古学、先住民考古学そしてツーリズムに共通しているのは、「歴史文化の解釈をパブリックに伝えよう」という姿勢である。ツーリズムが生み出す人と人との交流を通じて、歴史文化の解釈や文化遺産が持つ価値を、その文化遺産を作りだした先住民族、法的な所有者、あるいは地域住民に伝えることは、文化遺産に対する理解力を高めるだけでなく、最終的には彼ら／彼女ら自身の文化財保護や利活用への参与を促そうとしている。こうした試みこそが、パブリック考古学での「考古学教育」「市民主導の考古学」、先住民考古学における「先住民族が参与する考古学の実践や文化遺産マネジメント」との共通項なのではないだろうか。

考古学における歴史解釈の担い手は、時に考古学者であり、時に先住民族を含む一般市民である。ここで考古学者には、出土した資料から過去の人々の営みを明らかにする専門家として、科学的なデータに基づいた解釈をパブリックに伝える義務がある。同時に、科学的な分析だけではなかなか理解できない先住民族の人々の価値観に基づく歴史解釈は、考古学的な解釈を豊かにするだけでなく、先住民族

の人々にとっても、アイデンティティや歴史観に対する認識を新たにする機会となりうる。

また、山村先生が指摘していたように、ツーリズムは「最も重要な文化交流の手段」である。先住民の歴史にかかわるツーリズムがあることで、観光客はこれまで知らなかった、あるいは異なる切り口から見る土地の歴史、人の歴史、を知ることが可能になる。さらに、その活動に主体的に先住民が参与すれば、先住民考古学でワトキンス先生が述べていたように、先住民の価値観が活かされた文化遺産ツーリズムの可能性を拡大させる力になるであろう。14日午後のセッションに登壇していただいた門脇こずえ氏、中井氏、原田氏、門脇賢司氏は、まさにこの先住民の価値を生かしたツーリズムに取り組んでいる主体者としての発表だったと言える。

5. 先住民文化遺産とツーリズムのこれから

北海道の先住民であるアイヌの人々が暮らしてきたこの地の歴史を語る際に、アイヌの人々の価値観抜きで、文化遺産を評価することはできない。昨日のパネルディスカッションの中で、ストーリーテリングをしてくださった結城氏は、「ずっと語られてきた土地の重みこそが、北海道の価値を上げる」と指摘されていた。さらに、原田氏も「北海道には地名をはじめとしてアイヌの人々とこの土地を結びつける痕跡が多く残っている」と述べておられた。それにも関わらず、長い間、考古学や文化遺産、ツーリズムを考える際に、こうした視点は抜け落ちていたように思われる。

従来の考古学はいま、様々な批判にさらされている。パブリック考古学の立場から、シャドラホール先生はこれまでの考古学が遺跡の発掘からその解釈評価までを独占してきたことを問題とし、考古学とパブリックの交流の重要性を説かれた。また先住民考古学の立場から、ワトキンス先生は先住民の文化遺産の意義が、これまでの考古学の評価基準では把握できないことを批判し、先住民独自の文化や価値観を反映した新たな評価基準が必要だと主張された。私は、従来の考古学にむけられているこうした批判を真摯に受けとめる必要があると考え、お二人の見解をアイヌ民族の文化遺産のあり方に反映できないかと考えてきた。そしてその可能性のある場として注目されているツーリズムは、その役割を十分果たすものと考えている。ただし、高崎氏が批判的に指摘されていたように、文化遺産ありきのツーリズム開発の危険性は十分に認識する必要がある。

今後も、このシンポジウムをとおして明らかになった問題点もふまえながら、先住民と文化遺産の持続可能なあり方を模索していきたい。